

文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」地域別意見交換会
「東北地区」平成20年2月19日（火）仙台

薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力
～遊びと農業の教育力が若者と社会を結ぶ～
(秋田県立大学)

事例紹介内容の骨子

1. 秋田県立大学の学部・学科構成と各キャンパスの位置

《大学紹介パンフレット「いろいろな自分を見つけよう」で説明》

2. 薫風・満天フィールド交流塾プログラムの提案の背景

1) 生物資源科学部アグリビジネス学科（平成18年発足）

それ以前は、秋田県立大学短期大学部、秋田県立農業短期大学
教育重視の風土、「耕学一如」、文部科学省GPに3度応募

2) 学生支援GP（学生の人間力を高め、人間性豊かな社会人育成）へ応募

私たちは何をやり、何を知り、何を持っているか

①作物栽培サークルへの支援

《論文「作物栽培サークル「畑っこ」と農業教育」秋田県立大学短期大学部紀要第2号(2001年)で説明》

- ・ 自主性の大切さに気づく、自分を見つめる、などの教育力を農業やサークルは持っている、ということを知っている
- ・ 学生と教員の距離が近い、という伝統を持っている

②地域による農業教育の導入

《論文「地域と取り組む農業教育」秋田県立大学短期大学部紀要第3号(2002年)で説明》

- ・ 職業観、農家や農村生活への理解（社会性）を地域は育むことができる、ということを知っている
- ・ 学生と交流していただける地域の農家を持っている

3. 薫風・満天フィールド交流塾プログラムの内容

《PDFファイルA 「薫風・満天フィールド交流塾」で説明》

4. 薫風・満天フィールド交流塾の活動状況

《PDFファイルB 「薫風・満天フィールド交流塾」の活動状況で説明》

PDFファイル A 「薫風・満天フィールド交流塾」

文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

薫風

満天

～遊びと農業の教育力が若者と社会を結ぶ～

フィールド交流塾

Kunpu-Manten

Akita Prefectural University

<http://www.akita-pu.ac.jp/kunpu-manten/>



公立大学法人
秋田県立大学
Akita Prefectural University

学生の人間力向上のために

薫風・満天 フィールド交流塾

選定

秋田県立大学が提案する大学の資源を活かした「薫風・満天フィールド交流塾」という取組が文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援G P）に採択されました。学生支援G Pというのは、大学改革のための優れた取り組みとして、文部科学省が選定するものです。

遊 び を 起 点 に ———— 自然・農業・農村

本取組は、若者の人間力向上という社会的要請に応えるため、自然との交流（遊び）と農業の教育力を活かした学生支援を行い、行動力と創造力に富み社会性豊かな人材を育てようとする取組です。その特徴は、豊かな自然、農業・農村、それらを教育研究している多様な教員を資源とした「薫風・満天フィールド交流塾」を開設することです。この「薫風・満天フィールド交流塾」では、様々な動植物に触れ自然のなかで遊び、農業を体験することで、感性、探求心、コミュニケーション力、行動力および創造力を培うことを期待しています。

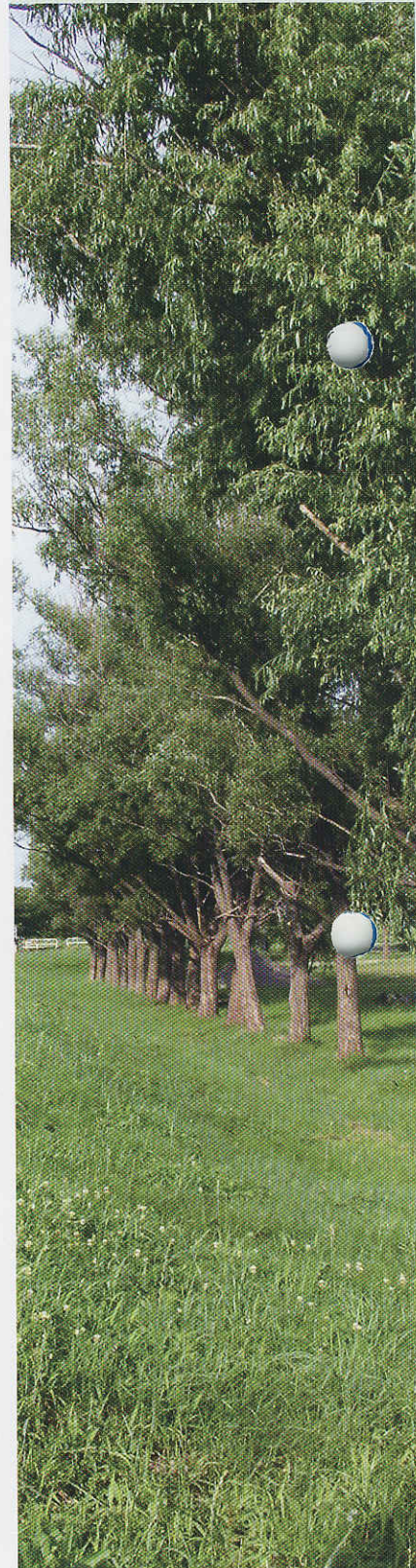
また、本取組では、学生が農村に出て地域の人々と生活や作業を共に行う中で、農村の伝統や文化に触れながら、思いやりの心、達成感、協調性を育み、農村生活への理解を深め、社会性の向上につながる機会の提供も計画しています。

本取組での体験は、学生の学修への動機づけを明確にし、本交流塾と学修の相乗効果によって、本学の目指す人間と生物資源との関わりを理解し、未来を逞しく切り拓く人材が育つものと期待しています。

■取組の趣旨・目的

現在、意欲・活力のない学生等が増加しているといわれる背景には、最近の就業環境や経済環境の悪化という社会的状況もありますが、むしろ、かつては当然であった“遊び”の機会、即ちその過程で感動や発見、挑戦などを体験し、結果として行動力、創造力や社会性を身につける場面が少ないことが起因になっていると考えられます。

本取組の趣旨は、学生に体験を経て醸成される活力や豊かな感性、主体的な行動力を身につけられるよう支援することです。本学には約200haの圃場と動植物資源や諸施設を擁する「フィールド教育研究センター」があり、広い農村も近在しています。これらの農業・農村、生物、自然環境の持つ教育力と「フィールド教育研究センター」の地域交流機能を有機的に活用し、学生がいつでも自由に“遊び”を起点として自己啓発ができる場と支援体制を「薫風・満天フィールド交流塾」として構築し、「見る」、「体験する」、「交流する」、「考える」、「行動」することを通して、問題意識やコミュニケーション能力の向上を図り、意欲的で人間力を備えた若者を育成することが、本取組の目的です。



本 取 組 の 計 画

薫風・満天フィールド交流塾には北東北の豊かで厳しい自然の春夏秋冬があり、多様な専門と特技を持つ教職員や地域のサポーターがいます。そして、交流塾の核となるフィールド教育研究センターには「教育研究実践エリア」、「農村環境・生態系保全エリア」、「地域交流エリア」、さらに「アグリビジネスエリア」が整備され、圃場・温室・水路、ビオトープ、交流農園や動物広場など、機械設備を含めるとひとつの農村集落とも言える環境がつけられています。すなわち、ここには学生が“遊び”を起点として自由な発想でやりたいことが出来る素地が幅広く揃っています。

学生たちはここで様々な“遊び”を通じて行動力、創造力、社会性を高めることができます。また、「人間力」を高めた若者が、農業系サークルの大学間ネットワークを構築し、そのネットワークを基盤として「全国農業・農村学生フォーラム」を開催することで、活動成果を社会に発信し、自信を持って社会に船出することが本取組の最終目標です。



図 1. 本取組の全体像

■学生の“遊び”を起点とした活動を実現するための多様なメニューと人間力の涵養 (図1)

薫風・満天フィールド交流塾では、学生が“遊び”の多様なメニューを整え、自由な発想に基づく“遊び”と“学び”を支援します。メニューは、四季折々の自然や生き物に接するものをはじめ、作物栽培や家畜の飼育、食品加工や食文化、伝統工芸や郷土芸能など農村文化に関わるものを具体化し、参加者を募り、場所、指導者、道具、材料などの面で支援する計画です。また、メニューについては学生の要望に加え、教職員や地域住民の意向も反映することになっています。実施には、学生の主体性を尊重し、平日の放課後等は自主的な活動、休日は教職員や地域住民なども含めたグループ活動が中心となります。

本取組では、“遊び”の発展モデルとして3段階を想定しています。第1段階では、物事に感動する感性、発見する喜びや達成感、挑戦心や行動力が養われること。第2段階では、1年目の参加者に対するサポート、子供のプレーリーダー役や地域住民との対応、他大学との交流など運営を補佐する役割を担い、組織運営やマネジメント能力、リーダーシップなどの資質が養われること。第3段階では、それまでの過程で得られた感性や人間力を、勉学や就業、社会との関わりなど自身の将来性に活かしていくことです。なお、このような活動は、メンタル面のカウンセリング機能を補完し、加えてリフレッシュの機会を提供することにもなります。

■本取組の年次計画 (図2)

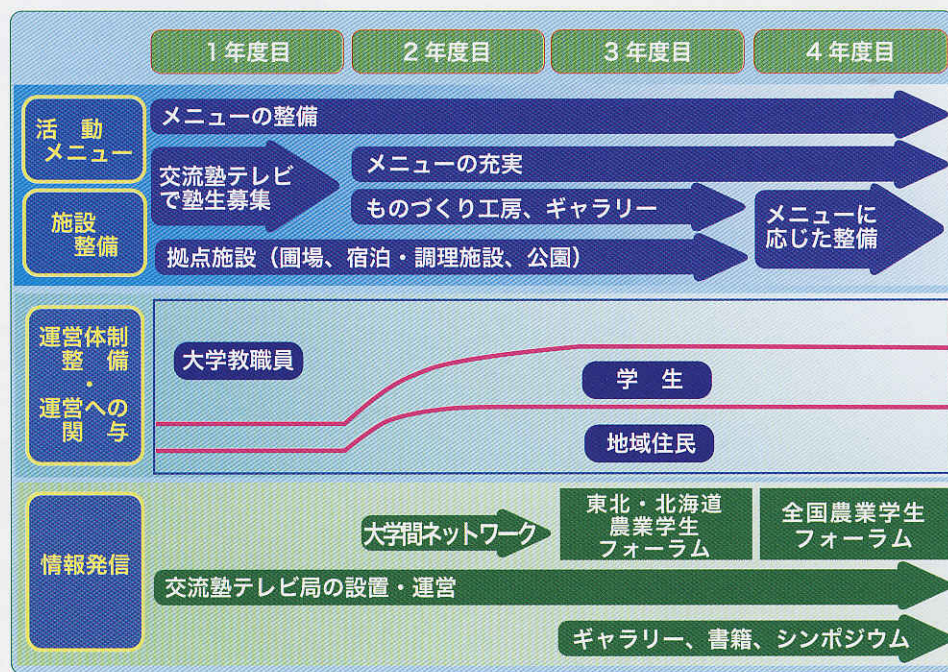


図2. 本取組の年次計画

初年度は学部教職員中心の運営体制をとり、活動メニューは活動支援チームが作成する計画です。また、学生向けの広報と情報発信のために「交流塾テレビ局」を開設し、施設面では調理機能等を整えることにしています。

2年度目は、支援教職員数を増やし、前年度からの塾生も塾の運営を補佐する役割を担うこととなります。また、大学間ネットワークづくりを開始し、活動メニューは塾生の主体的活動により充実させる予定です。施設面では、ものづくり工房や交流塾ギャラリーを整備することになっています。

3年度目は、塾の運営において可能な部分を塾生に委ね、学生の主体的活動活動へ重心を移しながら、大学間ネットワークの効果でさらに活動内容を充実させる計画です。ここでの大きな目標は、東北・北海道農業・農村学生フォーラム(仮)を開催すること、交流塾ギャラリーによる情報発信を開始することです。また、活動成果の刊行準備も予定しています。

4年度目は、大学間ネットワークと情報発信の総括的な位置づけともなる全国農業・農村学生フォーラム(仮)の開催を目指します。また、活動成果を刊行するとともに、成果の公表と総括を目的としたシンポジウムも開催する計画です。



評価システムの導入と特徴

本取組では、「薫風・満天フィールド交流塾」自体の評価と、学生自身が育てた感性・能力についての2つから構成される評価システムを導入します。(図3)

第1は「薫風・満天フィールド交流塾」への評価で、3つの評価体制を整備します。その1つ目は『塾生活動報告会』における自己及び相互評価です。活動内容や成果について報告するとともに、塾生が自己評価と相互評価を行います。次いで2つ目は塾長及び支援教員等で構成される『塾生支援チーム評価委員会』における学生の取組状況評価です。また、ここでは定期的に取組の進捗状況をモニタリング評価する機能をもたせます。最後の3つ目は地域住民・自治体・諸事業体により構成される『交流塾外部評価委員会』による総合評価です。ここでは目標到達度、課題克服対応のあり方、地域に与えた影響について評価します。この結果は次年度の取組に反映することになります。

第2は本取組の目標である学生の行動力・創造力・社会性の向上等の評価です。この評価は塾長、副塾長、アドミッションチーム、教務・学生委員会、就職支援チーム、カウンセラーから構成される『人間力向上評価委員会』で本取組の効果を定量的に評価するのがねらいです。

以上の評価システムは、大学における「人間力の発達」を支援する目的を達成するための客観的システムであり、最終的には4年度目のシンポジウムでその評価を総括することになっています。本GP補助期間終了後も、本取組及び評価システムは学生支援の重要な柱として継続させる計画です。

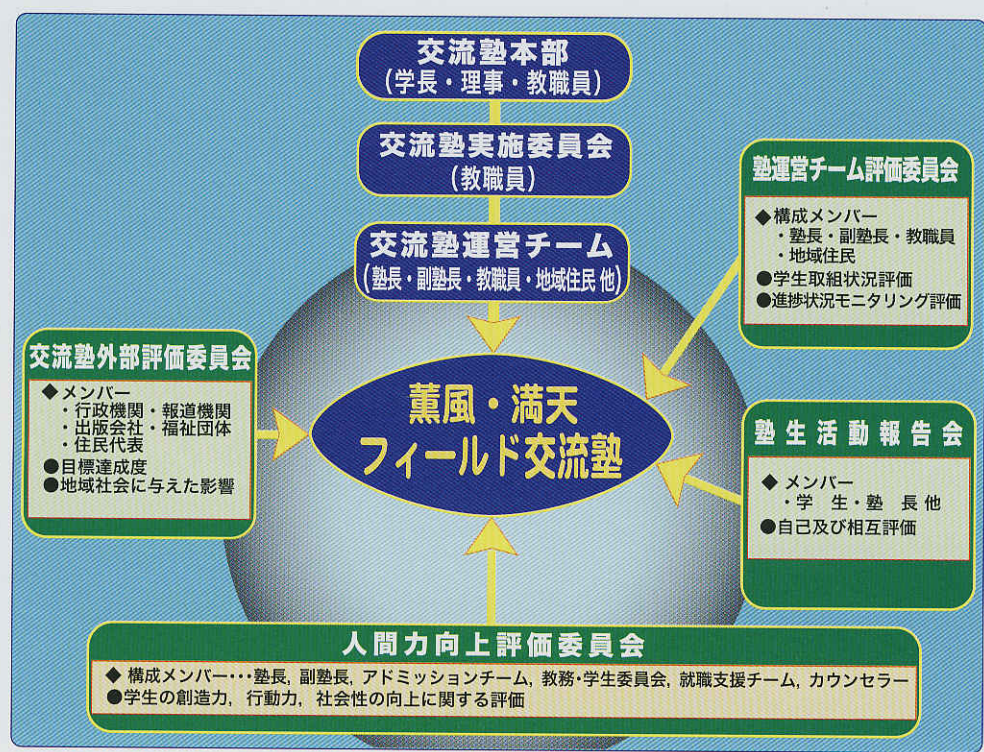


図3. 本取組の運営評価体制



初年度の活動紹介 >>>

● 第1回企画「ハタハタ満喫体験」

最初の第1弾企画には、秋田の食文化を知る体験として「ハタハタ」を取り上げ、男鹿市の北浦漁港を訪れた。ハタハタ漁に関心を寄せていた学生は、水揚げされたハタハタを見ながら説明に耳を傾け、水揚げ場や選別作業などを見学しました。また、ブリコ（卵）を頬張りながら漁師と交流する光景は印象的でした。参加学生は、秋田の特産である「ハタハタ」がどのように水揚げや出荷されているのかなど、見学と地元の漁師との交流をとおして知識を深めることができました。

見学後は、本学のフィールド教育研究センターにて学生がハタハタ料理の「しょっつる（魚醤）鍋」づくりに挑戦し、試食体験しました。女子学生は、ハタハタの調理指導を受けながら鍋づくりに励み、男子学生は昔ながらの薪割りとお釜での炊飯に挑戦しました。学生手づくりの「しょっつる鍋」と御飯を最後に試食して終了しました。



● 第2回企画「ハタハタ鮎の製造体験」

ここでは第1回企画に引き続きハタハタの加工を体験しました。今回は、男鹿市北浦の武田水産株式会社の協力を得て、ハタハタ鮎（飯ずし）製造を体験しました。不慣れな手さばきでしたが、工場職員からの指導を受けて鮎製造を楽しみながら学びました。学生が製造したハタハタ鮎は第4回企画まで熟成させました。



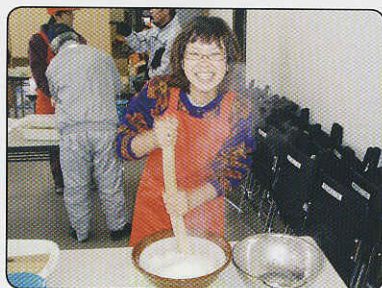
● 第3回企画「アイスクャンドルをつくってみよう」

かまぐらとひと味ちがう、幻想的な輝きをみせるアイスクャンドルをつくり、若い学生の感性やアイデアを引き出す、自然と触れあう企画を実施しました。あいにく、降雪がなく、冬景色のなかでの灯火は実現しなかったものの、参加したは2日間で約300個の鮮やかな彩りのアイスクャンドルを制作しました。



● 第4回企画 「たんぼをつくってみよう」・「ハタハタ鮭の試食体験」

秋田県を代表する郷土料理のひとつ「たんぼ」と「きりたんぼ鍋」づくりを体験しました。秋田県北部の大館市で体験交流型の直売所「陽気な母さんの店」を営む「陽気な母さんの店友の会」の方3名の指導を受けながら、御飯をすり鉢で潰し、秋田杉の串に巻いて炭火で焼き、「たんぼ」をつくり、みそたんぼときりたんぼ鍋にして試食しました。また、前回のハタハタ鮭が食べ頃を迎えたので、これも合わせて試食をおこないました。本格的な作り方を学んだ学生たちには、みそたんぼ、きりたんぼ鍋、ハタハタ鮭のいずれも大変好評でした。



● 第5回企画 「比内地鶏の薫製と豚肉のベーコンをつくってみよう」

食品添加物を使わずに、昔ながらの製法による燻製づくりを2日にわたって行いました。素材は比内地鶏と豚のバラ肉で、初日は比内地鶏をと殺・解体し、肉を塩漬けにして1晩血抜きをしました。2日目は比内地鶏と豚肉を塩・砂糖・香辛料・香味野菜に漬け込む作業を行いました。これは一定期間漬け込んだ後、流水で塩抜きし、2月中旬に開催される「薫風・満天フィールド交流塾 雪まつり」の際に燻して試食する予定です。



■ お問い合わせ先

〒010-0444 秋田県南秋田郡大潟村南 2-2
 公立大学法人 秋田県立大学 大潟キャンパス
 「薫風・満天フィールド交流塾」

学生支援 GP 事務局

代表：アグリビジネス学科准教授 露崎 浩

Tel: 0185-45-2026 (代表)

Fax: 0185-45-2377

e-mail: kunpu@akita-pu.ac.jp

URL: <http://www.akita-pu.ac.jp/kunpu-manten/>

Kumpu-Manten



PDFファイル B 「薫風・満天フィールド交流塾」の活動状況

「薫風・満天フィールド交流塾」の活動状況

(学生支援GP地域別意見交換会「東北地区」資料)

秋田県立大学

平成20年2月18日作成

目 次

選定理由書	1
平成19年度「薫風・満天フィールド交流塾」の活動状況一覧	2
「薫風・満天フィールド交流塾」の学生への案内・入塾申し込み書	3
「活動メニュー」の案内と申し込み用紙（第4回活動メニューのもの）	4
「活動報告書」（第1回～3回活動メニューのもの）	6
平成20年度「活動メニュー（案）」	9
「薫風・満天フィールド交流塾」の運営方法、運営チーム構成	10
これからの「薫風・満天フィールド交流塾」	13

平成 19 年度

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

選定理由書

大学・短期大学・ 高等専門学校名	秋田県立大学
プログラムの名称	薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力
(選定理由)	
<p>秋田県立大学においては、学生支援を行う教職員の資質向上のための FD・SD 活動に積極的に取り組むなど、包括的な支援の実効性確保のための取組を着実に実施されています。</p> <p>今回申請のあった「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力」の取組は、大学が保有する豊かな環境資源を活用し、自然を教育者と見立て、若者の人間力を育むことをねらっているものであり、「人間力向上」という新たな社会的ニーズに対応した地方大学ならではの特色ある学生支援であると考えられます。</p> <p>本取組は、学生に自然や農業との交流で「遊び」を経験させ、その「遊び」を起点として、人や社会に対する様々な「気づき」を持たせ、最終的に「人間力向上」を図るというものであり、この「遊び」に向けたエネルギーを利用して、様々な「気づき」に到達させようとするところに、本取組のアイデアがあると考えられます。</p> <p>地域との連携、農学系サークルの大学間ネットワークの構築など、学外との連携も計画されており、この取組の社会的効果が期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。</p>	

平成19年度「薫風・満天フィールド交流塾」の活動状況

(平成20年2月18日作成)

1. 活動メニュー等

月 日	内 容	説 明
12月9日	ハタハタ満喫体験 薫風・満天フィールド交流塾開塾式	男鹿市北浦漁港見学、大潟キャンパスフィールド教育研究センター(大潟キャンパスFC)で試食 大潟キャンパスFCで実施
12月16日	ハタハタ鮭の製造体験	武田水産株式会社工場内で製造(男鹿市北浦)
12月23日	アイスキャンデルづくり	大潟キャンパスでつくる
12月24日	アイスキャンデル飾り付け、点灯	大潟キャンパス学生寮前で実施
1月19日	ハタハタ鮭試食 きりたんぼ鍋づくり体験	12月16日製造したハタハタ鮭の試食(大潟キャンパスFC) きりたんぼづくり、きりたんぼ鍋づくり試食(大潟キャンパスFC)
2月2,3,15,16日	薫製作り	本物の薫製作り(大潟キャンパス)
2月15,16日	他大学との交流	宮城大学自然研究部と本学のサークル「草っこ」等が交流(大潟村、大潟キャンパス)
2月16日	交流塾雪まつり	クロスカントリースキー、かまくらづくり、石焼き鍋作り体験(大潟キャンパスFC)
春休み期間中	学生が希望する活動支援	釣り、山歩き等季節に応じた活動支援(地域、大潟キャンパス)

注)大潟キャンパスにはアグリビジネス学科棟(3,4年次)およびフィールド教育研究センターがある

2. フォーラム等の参加

月 日	内 容
2月9,10日	平成19年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム(横浜)」参加、ポスター発表
2月19日	文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」地域別意見交換会「東北地区」に参加・発表

3. 新聞等での記事掲載

月 日	新聞社 等	説 明 (記事タイトル)
12月7日	記者会見	河北新報社・秋田魁新報社・読売新聞社が取材
12月8日	河北新報社	学生の「遊び塾」開講 あす・秋田県立大
12月8日	秋田魁新報社	遊びで「人間力」育成 県立大が新プログラム
12月8日	読売新聞社	「遊び」活用 体験学習 県立大 かまくら作りやクロスカントリー
12月9日	秋田放送(ABS)取材	ハタハタ満喫体験を取材
12月15日	秋田魁新報社	県立大・体験プログラム ハタハタ料理に挑戦 学生15人男鹿で漁港も見学
12月17日	秋田放送(ABS)	ニュース(リアルタイム)放映
2月1日	秋田県全戸配布広報紙	特集 薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力～秋田県立大学～
2月14日	旺文社	大学受験「バスナビ」HP 学校注目情報 学生の行動力や社会性を養う「薫風・満天フィールド交流塾」秋田県立大学
2月18日	秋田魁新報社	県立大 雪まつり かまくら体験 大潟村 宮城大からも参加

4. 会議

月 日	内 容
11月9日	第1回拡大塾運営チーム会議
11月16日	第2回拡大塾運営チーム会議
11月26日	第3回拡大塾運営チーム会議
11月28日	第1回交流塾本部会議
12月3日	第4回拡大塾運営チーム会議
12月7日	第5回拡大塾運営チーム会議
12月17日	第6回拡大塾運営チーム会議
12月21日	第7回拡大塾運営チーム会議
1月7日	第8回拡大塾運営チーム会議
1月18日	第9回拡大塾運営チーム会議
1月25日	第10回拡大塾運営チーム会議
1月28日	第1回交流塾実施委員会会議
2月1日	第11回拡大塾運営チーム会議
2月14日	第12回拡大塾運営チーム会議

「薫風・満天フィールド交流塾」入塾申し込み用紙

記入年月日 年 月 日

氏名: _____ 学科: _____ 学年: _____ 学籍番号: _____

希望する分野(該当する分野の番号を○で囲む)

1. 自然・農との交流 2. 人との交流(サークル活動) 3. 社会との交流 4. 社会への発信

希望する具体的な内容

(記入例:星座の観察をしたい)

希望する活動に必要な資材など(できるだけ具体的に)

(記入例:星の図鑑、天体望遠鏡)

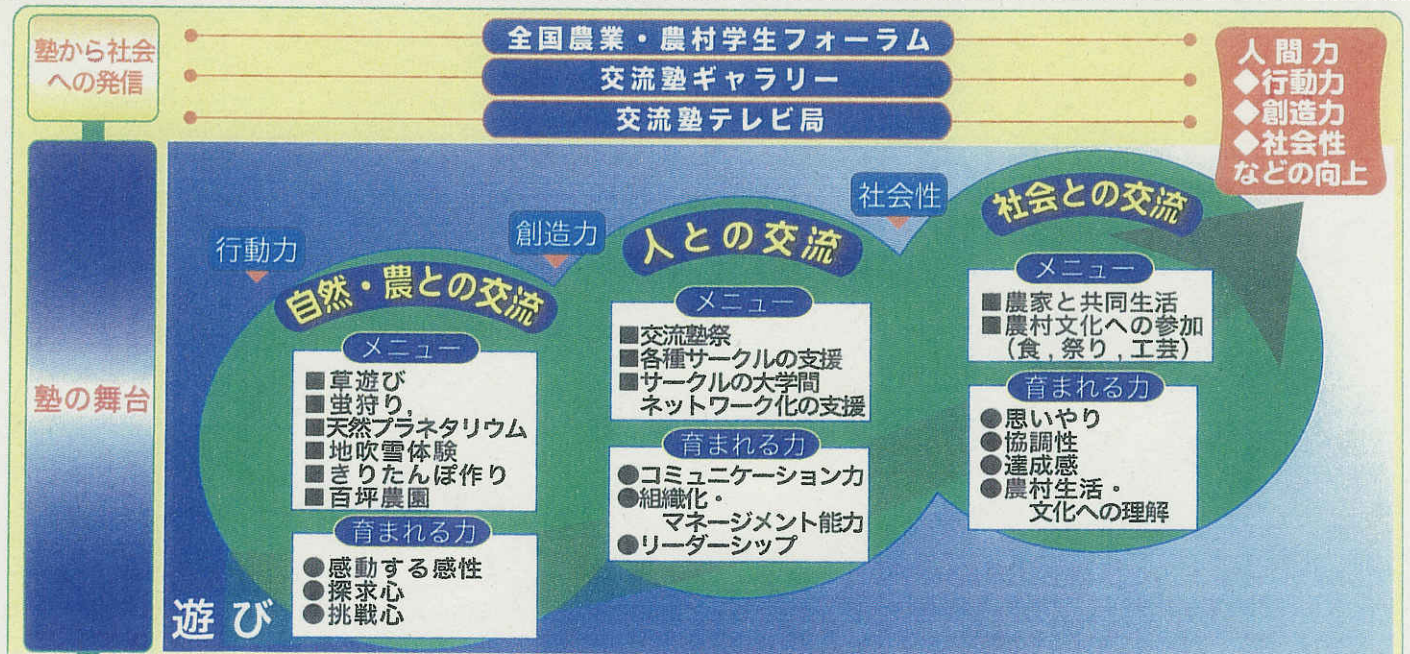
活動をいっしょに行うことを希望する教職員がいる場合、その人の氏名と所属

氏名 _____ 所属 _____

連絡先(Eメール、携帯電話等)

清新寮の方は部屋番号を記入:部屋番号 _____

塾生には、「活動報告書の作成」、「塾生活動報告会への参加」および「人間力向上に関する評価への協力」などをお願いすることになります。



提出先: 秋田キャンパス/事務室「薫風・満天ポスト」 大湯キャンパス/薫風・満天フィールド交流塾事務局(安田)

文部科学省

新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

公立大学法人

秋田県立大学

平成19年度からスタート

大学に「遊び」の場ができます

薫風・満天フィールド交流塾

第4回塾企画活動メニュー

活動内容 ハタハタ寿司試食体験

きりたんぽづくりときりたんぽ鍋調理試食体験

活動日 1月19日(土)

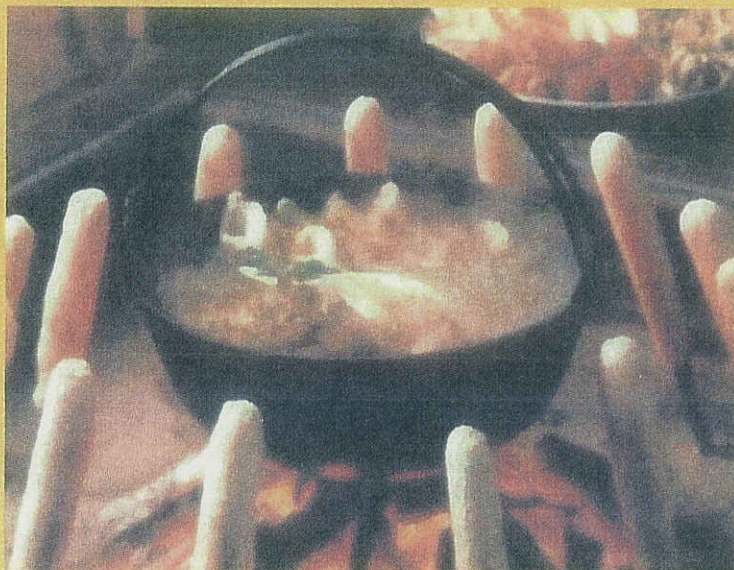
活動場所 大湯キャンパス

送迎バス 追分駅から午前9時30分出発

(センター試験のため学校内には立ち入りできません)

概要 「第2回活動メニューハタハタ寿司の製造体験」でつくったハタハタ寿司の試食。きりたんぽづくり、きりたんぽ鍋づくりと試食

申込締切 1月18日(金)



郷土食づくりと試食体験をしてみませんか。

活動内容 ハタハタ鮠の試食 たんぽときりたんぽ鍋づくり・試食

活動日 1月19日(土) 10時～14時頃

出発時間 追分駅 午前9時30分(バスで送迎いたします。)

活動場所 大潟キャンパス・フィールドセンター(集合時間:午前10時)

概要

- ・ツバ釜でご飯を炊いて、たんぽづくりを体験する。
- ・きりたんぽ鍋をつくる。
- ・きりたんぽ鍋完成後、12月16日に塾生が製造したハタハタ寿しと一緒に試食する。(お昼頃を予定)
- ・参加料は無料です。

※ハタハタ寿しはたくさんありますので、お裾分けがあるかも?欲しい方は入れ物を持参した方が得かも?

申込締切 準備の都合上、1月18日(金)午前中とします。

(事務局へ必着のこと。電話・メールでも可。)

今回は、冬休み、今後の日程から実施日が限定され、とりまとめ期間が短くなっていることをご了承ください。

参加を申し込まれる方は、下記の申込書に記載のうえ事務局へお届けください。

(電話:0185-45-9651 メールアドレス:kunpu-manten@akita-pu.ac.jp)

※先般のハタハタ鍋の調味料としてしょつつるを使用しましたが、しょつつる製造元の諸井秀樹さんから秋田キャンパスで「しょつつるから秋田の食文化を考える」としての講演がありますので、受講をお奨めします(専門基礎科目「食文化と地域」の講義にて実施)。日時は1月18日(金)午前8:55～9:20、場所はA303です。受講するにあたり申込みは必要ありません。直接A303へお越しください。

切り取り線

「郷土食づくりと試食体験」参加申込書

氏名	学科	学年	学籍番号	連絡先(携帯番号)	メールアドレス	送迎バス利用 (いずれかに○)
						有 無
						有 無
						有 無

送迎場所:今回はセンター試験当日となるため、バスの出発場所は追分駅としましたのでお間違えの無いようにしてください。

※参加者の個人情報、薫風・満天フィールド交流塾活動メニューの参加者を取りまとめ、連絡調整に使用するものです。他に提供することはありません。

薫風・満天フィールド交流塾

第1回活動

平成19年12月9日実施

ハタハタ鍋満喫体験 活動報告

(写真①)前日から沖止め(網を揚げ禁漁する)となり、9日当日は水揚げを見学することができなかったが、ハタハタの生態、産卵習性、漁獲方法、水揚げ方法、選別方法、出荷方法及び秋田県におけるハタハタの食文化としての位置づけ等について説明を受けた。

現場での選別作業、ハタハタ網からブリコを外す作業、入札場所でハタハタの荷姿を見学した。新鮮なハタハタと鮮度の悪いハタハタの区別について説明を受け荷姿を見ることで実感した。漁師との質問や雑談等の会話でハタハタ漁について学んだ。

(写真②)学生が薪割り・炊飯グループ、鍋準備グループ、ハタハタ調理グループに分かれ作業を体験した。薪を燃料としてツバ釜で炊飯したが、電子ジャーで炊いたごはんより圧倒的にツバ釜のほうがおいしいと評価された。ハタハタ鍋は、味噌味とショウツル味をつくり、双方を味わった。個人によって好みに差異がありました。初めてハタハタを食べる学生は食感に戸惑いもあったようだが、慣れるにしたがっておいしく食べていたようだ。

(写真③)食事後、薫風・満天フィールド交流塾開塾式を行った。学生が進行をつとめ、それぞれの立場から意見・期待・要望が述べられた。最後に全員で後片付けを行い終了し散会した。

参加者数 学生14名、教職員7名

活動評価

大変楽しかった8名、楽しかった7名、普通0名、あまり楽しくなかった0名、楽しくなかった0名

活動成果(意見)

- 説明や現地の人たちの様子や会話から、秋田(北浦港)におけるハタハタ漁の実態を良く理解できた。捨てられるハタハタがかわいそうだった。
- 薪割り、炊飯、鍋づくりとハタハタ料理を楽しむ過程で身近な作業を体験できた。
- ツバ釜で炊いたご飯は本当においしかった。良い体験ができてありがたかった。
- このような体験は有益で、私の成長と思うので、意欲的に取り組みたい。
- 知らない文化を学ぶことができたし、秋田伝統の味を体験できてよかった。こんなに立派なハタハタは見たことも食べたこともなかったので、とても嬉しかったし良い経験になった。
- 皆で教室の外で学べるのがとても楽しかった。
- 漁港の人たちとふれあってみて、昔真剣にハタハタを取っている人だと感じ、また良い経験になったと思う。収入の多い人は2,000万円もあると知って驚いた。
- 魚をさばるのが初めてだったので、少し緊張した。さばくの限らず今日は初めて体験することばかりで興味深く面白かった。友人の誘いで参加した活動でしたが、とても良かった。
- ハタハタ鍋は、まだ慣れるのに時間があると思った。新しいことにふれるのは、自分の新しい見解や考えを得ることができるので、このような活動にはできるだけ参加したいと思った。
- 「ハタハタは馬の鼻息で食べる」そのくらいさっと煮るだけで食べることができる。こんなおいしい魚が食べられなくなるのは困るので、毎年食べられるように保護していくことも大事だと思った。



薫風・満天フィールド交流塾

第2回活動

平成19年12月16日実施

ハタハタ鮓製造体験 活動報告

(写真①)生ハタハタの頭と内臓を取り除く

(写真②)切り身を作る際すべらないように水洗い

(写真③)漬け込む大きさに斜めに切った

(この後、通常は3日間程度水洗い)

(写真④)寿司に入れる笹の葉カット

(写真⑤)人参の加工、生姜のせん切り

(写真⑥)重石で水洗いした切り身の脱水作業

(写真⑦)ご飯に麹・塩4%、人参のすりおろし・生姜・酒・みりんを加え丁寧に
攪拌して原料完成

(写真⑧)桶に笹の葉を敷き原料2kg入れ手で押して平らにし、
菊・フノリ・人参を敷く。さらに笹の葉を敷き繰り返し一杯にする
発酵が失敗しないよう最上部に笹の葉を隙間なく
敷き、捨て飯をかけて作業終了。熟成期間は
約3~4週間を要するので、その間は武田水産で
保管していただき、完成後引き取り試食することとした。

参加者数 学生5名、教職員7名

活動評価

大変楽しかった3名、楽しかった4名、普通1名、
あまり楽しなかった0名、楽しなかった0名

活動成果(意見)

- 3週間後が待ち遠しい。ハタハタ鮓は「寿司」とは異なり、捨て米などについて、米をメインにしていないことから、副食として、酒のつまみとしても用いられることがわかった。
- 重いものを持つなど意外と重労働も作業工程の中にあり、大変であるを知った。ほとんどの作業が手作業なのに驚いた。
- 大量に獲れたハタハタを長期間食べるために、保存法など様々な工夫や知恵がこの「ハタハタ鮓」には詰まっていた。
- 地元産の素材を生かしてつくる昔ながらの食品であることがわかった。
- 漬け込み前に数日間の血抜き、塩でしめる、水で塩抜き、酢漬、脱水の行程があることがわかった。
- 分量の目安を教えてもらった。意外に簡単で家でも作れるなと思った。
- ハタハタ鮓を自分から進んで食べようとしたことが今まであまりなかったので、見た目しか知りませんでした。今日は製作工程の中で味見をした。3週間後に試食をしてハタハタ鮓がどんなものか、話れるようにしたい。



薫風・満天フィールド交流塾

第3回活動

平成19年12月23・24日実施

アイスキャンドル 活動報告

12月23日、午後1時から大湯キャンパスでアイスキャンドルづくり

(写真①)プラスチック容器等に高さをあわせて切った塩ビ管(輪ゴムを挟む切り込み、下にパラフィンを張り水が入らないよう加工したもの)を入れ輪ゴムで中心に固定し型をつくる。絵の具を溶かして色づけした水と氷を入れる。(短時間で凍らせるために今回は粉砕氷を利用)冷凍庫で凍らせる。一部は液体窒素で凍らせ、冷凍庫で保管。凍ったプラスチック容器の表面と芯となっている塩ビ管にお湯をかけ、氷を取り出して冷凍庫へ保管。

12月24日、午前8時30分から大湯キャンパスでアイスキャンドルづくり。

当初計画ではこの日のアイスキャンドルづくりは午後1時からの予定だったが、作業が遅れていることから、学生が進んで午前8時30分から作業した。

(写真②)アイスキャンドルの土台となる板を加工した。(15cm四方に作ったベニア板の中央にネジ釘を打ち込みロウソク台とし、縁に釘を打ち込んで傾斜面に据え付けた)。午後からは飾り付けのレイアウトを考え準備、「2007Xmas」の文字を表現することとした。学生寮前の庭の傾斜部分を利用し、文字が立体的に見えるように板にロウソクを立て、文字の形に配置。ロウソク台の上から氷の型をかぶせてアイスキャンドルが完成し点灯したが、当日は風が強クロウソクに点火してもすぐに消えてしまうことから延期も検討した。しかし、学生のどうしても完成させるとの強い意志から、風あたりを弱めるためロウソクを短くするなどの工夫をして挑戦し、午後6時頃には大方点灯することができた。寒くて延期することも検討されたこと、風が強ク点灯に四苦八苦するなど条件はきわめて悪かったが、悪天候を克服しての点灯が学生の充実感を一層高めたのではないかと。

参加者数 学生3名、教職員3名、ギャラリー、協力者5~6名

活動評価

大変楽しかった2名、楽しかった0名、普通0名

あまり楽しくなかった0名、楽しくなかった0名

活動成果(意見)

- また、やりたい。結婚して初Xmasにもやりやい。
- 最初はどうなるのか不安だったが、みんなで協力して自分たち独自の、世界に一つしかないアイスキャンドルを作ることができて楽しかった。
- 途中、雨が降ってきたり、氷がかたまらなかったり、風が強くて点灯式を盛大に行えなかったりといろんなアクシデントがあったけど、大きな達成感があった。
- 飾り付けは寒かったし、風が強くて大変だったけど、24日にできて良かった。諦めなくて良かった。厳しい条件の中でも諦めずに工夫してその場を切り抜ける能力が身についた。でも、私が諦め悪くて、皆を寒い寒い思いさせちゃったのは反省してます。でも、皆であんなに頑張って笑顔で作り上げたモノだったからどうしても諦めたくなかった。そんな仲間とこの体験ができて良かった。
- アイスキャンドルの作り方がわかった。
- 容器から抜くときのコツを身につけた。
- 色付けの時に良い色を作ろうと頑張ったら、小学校の時の図工の時間を思い出した。とっても楽しかった。
- 上手にできたし、コツをつかんだと思うので、また、もう一度挑戦したい。もう一回やりましょう。



平成20年度薫風・満天フィールド交流塾活動メニュー(案)
 (学生、教職員および塾が平成20年度に活動を希望しているメニュー)

活動メニュー	活動内容	活動の概要	提案元		
自然・農との交流	自然との触れあい (外遊び)	山菜採り	季節毎の山菜とり体験と食に至るまでの体験	学生	
		釣り	河川、湖水、海釣り体験	学生	
		山歩き	山歩きによる自然とのふれあい	学生	
		天体観測	天体望遠鏡での宇宙観測	学生	
		雑草観察	雑草観察と利用	学生	
		いかだ	いかだづくりと川くだり	学生	
		水路探索	ボートによる河川等水路探索	学生	
		カヌー	手造りカヌーで河川・湖水の散策	学生	
		キャンプ	キャンプ体験	学生	
		ロッククライミング	ロッククライミング体験	学生	
		ロードバイクキャラバン	ロードバイクで長距離ツーリング	学生	
		雪中散歩(スキー)	クロスカントリー体験	学生	
		アイスキャンドル	アイスキャンドルをつくり幻想的な体験	学生	
	農とのふれあい	堆厩肥作り	食物残渣を利用した堆厩肥づくり、堆厩肥からバイオエネルギー作り	学生	
		野菜・作物づくり	土作りから収穫、試食までの体験	学生	
		ラジコンヘリ	ラジコン操縦技術の習得と農業への利用	学生	
		蜂蜜	養蜂と蜂蜜づくり体験	学生	
		ハーブ園	多くの種類のハーブづくり	学生	
		動物とのふれあい	各種動物の飼育とふれあい	学生	
	食品加工	乳製品	乳製品の製造体験	学生	
		発酵食品づくり	どぶろく・味噌・納豆・ヨーグルト等	学生	
		燻製	ベーコン、いぶりがっこ等の製造試食	学生	
		漬物	各種漬物の製造	学生	
		各種料理づくり	地産地消をメインとしたレシピづくり、スローフード運動の理解	学生	
		ものづくり	村づくり	活動拠点・蛍生息地・ハーブガーデン等環境整備づくり	塾
	日曜大工		木工、鉄工によるものづくり体験	塾	
	陶芸		七宝焼き等陶芸づくり	学生	
	ソーラーエネルギー利用		ソーラーカーづくり	学生	
	バイオエタノール		バイオエタノール製造と利用	学生	
	人との交流	サークル活動	大学農業系・自然系サークルとの交流	県内・外の大学の自然系・農業系サークルと秋田県立大のサークルとの交流	塾
			花壇作り	各地の観光総合案内所等に薫風・満天フィールド交流塾の花壇作り	塾
			新聞づくり	新聞づくりによる塾活動の社会への発信	学生
			テレビ局運営	キャンパステレビ 放送番組制作	学生
交流塾まつり		薫風・満天フィールド交流塾 夏まつり	学外交流・バーベキュー・竿灯・釣り・カヌー・気球・その他いろいろ体験を提供	塾	
交流塾まつり		薫風・満天フィールド交流塾 雪まつり	学外交流・雪中散歩・かまくら・雪合戦その他いろいろな体験提供	塾	
社会との交流		農家との共同生活	地域農家との交流	生産現場で活躍している農業者との交流	塾
		野外ライブ交流	一泊二日の野外交流	男鹿市の漁村で野外ライブ(和太鼓他)と学外交流	塾
		郷土食体験	ハタハタ漁見学、ハタハタ鍋	ハタハタ漁現場見学、ハタハタ鍋の試食	塾
			ハタハタ壽し製造	現場での加工技術習得、試食	塾
	きりたんぼ鍋づくり		きりたんぼづくりと試食	学生	
	郷土の文化、芸能体験	尺八づくりと演奏	塩ビ管尺八手作り・演奏講座で学ぶ	教職員	
		ケラ作成交流	現場で作成体験・若者との交流	塾	
ナマハゲ体験		男鹿の奇習ナマハゲ体験交流	塾		

薫風・満天フィールド交流塾の運営方法(平成19年11月9日決定)

1. 運営方針

塾生(学生)はもとより、交流塾に関わる教職員も生き生きと活動できる「ゆるやか・しなやか運営」を目指す。

2. 塾の構成

1) 塾生(学生、教職員)

2) 塾運営チーム

- ・塾長：交流塾の運営および塾活動の統括
- ・副塾長(2名)：塾長への助言・塾長代理
- ・塾長補佐(嘱託職員)：交流塾の管理運営、連絡調整および事業の実施支援
- ・塾庶務(嘱託職員)：塾の事務・経理、連絡調整および事業の実施支援
- ・塾推進員：担当分野*1の企画と実施により塾の運営を担うとともに、活動メニューの実施を支援する。塾長、副塾長は塾推進員を兼務する。

(*1) 担当分野例：塾生募集、活動メニュー整備、施設整備、大学間ネットワーク
・学生フォーラム、地域交流・広報、評価システム、予算など。

※塾運営チーム会議を月に1回開催する。

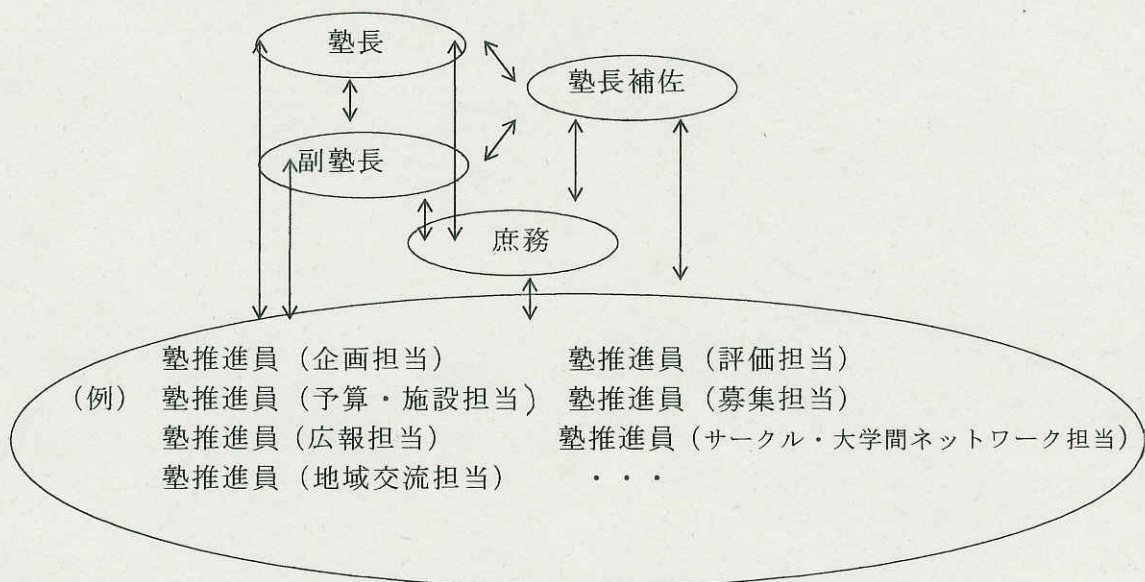


図1 薫風・満天フィールド交流塾運営チームの組織

3. 塾生の募集

1) 活動開始時の募集(2007年11月)

- ①ポスター、パンフレット等により、学内に周知を図る。
- ②学科長会議等を通じて全学部への協力を要請し、講義等の機会に学生への周知を図る。
- ③学生は、塾事務局に活動を希望する分野(自然・農との交流、人との交流、社会と

の交流) および具体的な内容を所定の用紙に記入して申し込む。また、活動とともにしたい教職員がいる場合は、その氏名も合わせて知らせる。なお、募集に際して塾生の義務*2を明示する。

(* 2) 塾生の義務：活動の記録・報告、塾生活動報告会および交流塾祭への参加、人間力向上に関する評価への協力。

※今年度の活動期間は、原則として12月から3月とする(来年度以降の継続可)。

2) 活動開始以降の募集(2008年1月~)

- ①塾の概要活動内容を「交流塾テレビ局」等を通じ学生へ周知し、入塾を希望する学生を募る。
 - ②学生は、既存の活動への参加を希望する場合は、その旨塾事務局に申し込む。
 - ③新規の活動を希望する場合は、上記1)の③に準ずる。
 - ④その他、具体的な活動希望が纏まっていない場合も、塾事務局で随時相談に応じる。
- ※活動期間は、原則として4月~3月とする(次年度以降の継続可)。

4. 活動メニューの設定から実施まで

活動メニューは、おおよそ次のような過程で設定・実施する。

- ①次の3つの方法により活動メニューを企画する。
 - A. 学生の要望
 - B. 教職員の提案(教職員の趣味や特技に基づくものなど)
 - C. 交流塾の企画(自然・農との交流、人との交流、社会との交流に繋がるもの)
- ②活動メニュー毎に、内容、予算等の素案を作成し、全学的な協力のもと、指導・協力者(以下、リーダーとする)を募る(可能であれば、リーダー候補者も交えて素案を作成する)。
- ③各活動メニューの素案、メンバー、リーダー候補者を検討し、実施の可否を決定する。
- ④活動メニューの実施に必要なリーダーとして、本学教職員や地域住民等に文書により活動への協力を依頼する。
- ⑤申し込みを行った学生には実施が決定された活動メニューを通知し、全学的にも周知する。
- ⑥活動メニューの実施に必要な指導・協力者と、必要な場合は学生を交えて内容、目標、予算等の計画を確認し、必要に応じて修正の上、活動メニューを実施する。
- ⑦活動メニューの実施にあたっては、各実施日の翌日までに活動報告を集約し、塾生以外の学生や教職員、地域住民からの評価や苦情も受け付ける体制を整える。
- ⑧進捗状況をはじめ、問題点や課題を随時把握し、必要に応じて対応する。

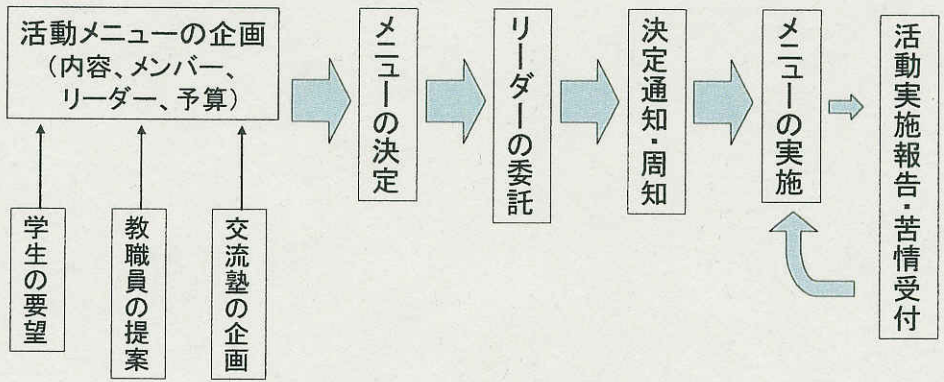


図2 活動メニューの設定から実施までの流れ

塾運営チームメンバー(平成20年1月11日現在)

- 顧問 ** * フィールド教育研究センター 教授
- 塾長 ** * (担当分野：統括、塾生募集) アグリビジネス学科 准教授
- 塾長補佐 ** * (塾の管理運営、学生・教職員・地域住民との連絡調整、
学生支援事業の実施支援) 嘱託職員
- 副塾長 ** * (活動メニュー整備・企画、施設整備) アグリビジネス学科 准教授
- 副塾長 ** * (大学間ネットワーク、学生フォーラム、拠点整備、シンポジウム)
フィールド教育研究センター 准教授
- 塾推進員
- ** * (塾生募集) 総合科学教育研究センター 教授
- ** * (塾生募集) 応用生物科学科 教授
- ** * (塾生募集) 生物生産科学科 助教
- ** * (塾生募集) 生物環境科学科 准教授
- ** * (人間力向上評価) 教務・学生チーム シニアスタッフ
- ** * (広報・地域交流、書籍) アグリビジネス学科 准教授
- ** * (予算作成・管理、拠点整備) アグリビジネス学科 准教授
- ** * (評価システム、報告書、書籍) アグリビジネス学科 准教授
- ** * (サークル活動、大学間ネットワーク、学生フォーラム、シンポジウム)
アグリビジネス学科 准教授
- 庶務 ** * (塾の事務・経理、学生・教職員等との連絡調整、学生支援事業の
実施支援) 嘱託職員
- 塾支援員
- ** * (木工関係メニュー) 木材高度加工研究所 教授
- ** * (虫あそび関係メニュー) 生物生産科学科 准教授
- ** * (魚関係メニュー) フィールド教育研究センター 教授
- ** * (食関係メニュー) アグリビジネス学科 教授

顧問～塾推進員が「塾支援員」を兼ねる場合がある。

塾支援員が増えることが期待される。

これからの薫風・満天フィールド交流塾

私の講義でのことですが、交流塾の活動に参加した学生の何人かで受講態度に変化がみられました。すなわち、目の輝きが、交流塾活動への参加の前後で変わりました（2名）。また、いつも眠っていた学生が、いくつかの活動への参加を経て、直近の講義ではとうとう、最後まで起きて聴くようになりました（1名）。そのような話を塾運営チームの先生たちに話すと、皆さん「本当かな～？偶然じゃない。」と、とりあってくれません。しかし、先日行われた秋田県立大学FD講演会で、演者の大関邦夫・前弘前大学副学長は、「講義外での学生との付き合い、そして、そこでの教員という立場を離れた生き様をみせることは、学生の講義や教員への意識を変化させると期待できる。また、学生に社会性を身につけさせる上でも重要である。」と述べておられます。「感性」、「挑戦心」、「行動力」というものを評価するのは容易ではないと思います。いろいろな手法を学び・使って学生の諸能力を評価し、さらなる人間力の向上に生かしたいと考えております。

ところで、平成20年度の「交流塾活動メニュー（案）」をみると、学生の塾への期待が伝わってきます。私どもは、これらの活動メニューを行うなかで、いくつかのサークルが誕生することを望んでいます。それらのサークルとは、例えば「農業生産と食に取り組むサークル」、「自然を楽しむサークル」、「活動拠点作りに励むサークル」などです。そして、これらの塾生の力により、「交流塾まつり」や「全国農業学生フォーラム」などが開催され、また活動成果の展示・公開をとおし、地域住民や社会との交流が進むことを期待しています。

学生がいつそう生き生きと輝く「交流塾」を、学生とともに創りあげたいと考えております。

皆さまのご指導、ご協力をお願いいたします。

平成20年2月18日

薫風・満天フィールド交流塾

塾長 露崎 浩